

「薄紙」

小西瞬夏

かなぶんの死も玩具の銃も黒し

牡丹崩る闇より水の白ひして

うたた寝やをとこの何処か黴くさし

たびびとよ夏蝶を飼ふ箱がない

水温む日やカナリヤにささやかれ

黒揚羽累々ピアノ調律師

肉声として春昼の咀嚼音

口細く開けいちはつの白さ言ふ

ゴム製の蜥蜴反抗期に終はり

しつけ糸抜く一息の涼しさよ

人形師の十指いきかふ春の闇

香水瓶逆さまに振りをみな老ゆ

献花真白少年に泉が足りぬ

無月なり黒鍵に闇集まりて

ゼリーふるふる人形の腕とれさうな

花野来て渴きしからだ沈めけり

その中にをろちの眠る茂りかな

月光ノナカノコサレテ牛ル手紙

包帯をほどけばふゆる夜の黴

芒原ひと呼ぶに息費やせり

指先に爪固くあり白桃熟る

少年の唇月光の白ひせむ

抽斗が閉まらぬゼリー固まらぬ

月光の指やはらかく調律師

自問して自答白桃蜜増やす

抜殻として春昼の昇降機

黒揚羽飼ふ函人形しまふ函

黒人霊歌いちじくに爪立てて

押入れに白靴仕舞ふ小鳥の死

秋蝶を薄紙剥がすやうに飼ふ